タテベヨシアキ　建部燃昭　字は子明。咏歸山人と號し、野人にして詩を作つた。伊藤祐之・大澤猶興等と同時の人。

タテベヨリハル　建部頼春　通稱孫四郎。能美郡府南御供田の地頭職であつた。元弘三年六月十二日上洛して宮方に屬したことが、南禪寺文書に見える。

タテマチ　竪町　金澤の町名。藩政中は本町の一町で、地子町の新竪町に對して俗に本竪町とも呼んだ。今いふ竪町・河原町・片町・古寺町の地は往時都べて犀川の河原であつた爲、古名を河原町というたが、犀川二筋の流を一筋とした時、共に町地とし、そのうち犀川の川瀬に添うて竪に付いた町が竪河原町であつた。この竪河原町が竪町に省略せられたのであるといふ。

タテリ　立里　鹿島郡大野木の内の小字。

タナカ　田中　石川郡中奥郷に屬する部落。寛文十年の村御印に田中兩村となつてゐる。

タナカ　田中　河北郡鞍月庄に屬する部落。

タナカ　田中　羽咋郡富木院に屬する部落。

タナガイ　田長　鳳至郡川西の内の小字。

タナカイツカン　田中一閑　通稱平三郎。諱は宗得、一閑はその號である。父宗二は處士で、初め京都に、後江戸に居た。一閑は高遠藩の鳥居左京亮忠常に仕へて居たが、鳥居氏が封を奪はれた爲流浪して江戸に出で、吉川惟足の高弟となつた。寛文六年五月保科正之の推薦によつて前田綱紀に仕へ、十人扶持五十兩を受け、九年十月十人扶持を増し、貞享二年八月江戸の藩邸に於いて初めて侯の爲に古事記神代卷を講じ、爾後恒例となつた。元祿十三年十二月七十六歳で歿。

タナカウリ　田中瓜　石川郡田中村産の甜瓜をいふ。延寶六年七月十村からの名産書上に『眞桑瓜田中村』とあるが、寶暦十三年の調書には『田中村眞桑瓜。但此眞桑瓜唯今作不申候。白熟瓜まで作申候。』とある。しかし加賀古跡考に、美濃瓜は田中村・德用村・村井村・北安田村・平木村等を美味とするとあるから、文化の頃には再び作つたのであらう。

タナカカクベエ　田中覺兵衛　正保三年石川郡寺津の石嶋といふ所より新たに川を掘上げ、上野・牛坂・土清水三ヶ村の灌漑に供する用水路を開いた。覺兵衛は浪人であつたといふ。

タナカキユウザエモン　田中久左衛門　父は葛野佐渡。久左衛門は氏を改めて前田利長に仕へ、合力として百三十石を領した。その子も亦久左衛門といひ、後裔相繼いで藩に仕へる。

タナカサブロエモン　田中三郎右衛門　能美郡德橋組の十村役で、頗る勸農に盡力した。天保十年浮塵子の稻田を襲うた時、木綿袋或は木實油を以て驅除に從事せしめ、更に後世再びかゝる患なからしめる爲に、埴田及び岩淵の兩所に虫塚を立てゝ之を警め、又安政二年から文久三年の間には遊泉寺銅山の經營に從うた。→ムシヅカ　虫塚。

タナカジユウザエモン　田中十左衛門　大聖寺藩士。上田善左衛門の次男で、田中源太夫の養子。祿百五十石。寶永元年正月御露次奉行となり、寶永六年同役大井佐五右衛門と共に前田利直の命を奉じて長流亭建築を主宰し、享保五年十一月歿した。

タナカシンゴ　田中信吾　通稱發次郎・一庵、諱は溫、號は球外。湯淺寛の次子で、小松に生まれ、田中謙齋の嗣となつた。安政三年大坂に上り、緒方洪庵に就いて蘭學と醫學を習ひ、遂に塾頭に進み、文久二年歸郷し、翌年藩の軍艦發機丸の醫務を督し、慶應元年八月醫學教師となり、壯猶館の飜譯方を兼ね、三年卯辰山養生所の開かれた後、藩及び縣の醫事に盡くす所多く、明治三十三年一月六十四歳を以て歿した。

タナカセンメイ　田中泉明　能登の人で、通稱周助、諱を惟貞というた。詩を佐々木泉玄に學び、青虹齋・翠堂・翠雲堂・雅學と號した。晩年鹿島郡久江に寺子屋を開き、慶應四年七月廿一日歿。

タナカダイゲン　田中大玄　諱は尚實。通稱大玄、奚疑と號した。醫を京師和田東郭に學び、寛政六年藩の老臣長甲斐守の侍醫となり、屢前田治脩・齊廣等の病を診した。文政八年九月歿、享年六十。

タナカタケユキ　田中猛之　通稱外衛。山村氏から出で、嘉永二年田中躬之の養子となり、躬之の歿後兵庫の名を襲ぎ、亦菊園と號した。安政元年人持組今枝氏の侍醫となり、四年三月明倫堂の國學内用に加り、次いで國學講師代理に進み、明治以降皇學訓導・文學訓導等となり、十年五月十五日歿。その遺詠は躬之のものと共に、園の菊に收められる。

タナカチヨウサイ　田中長齋　大聖寺藩士。前田利章に仕へて祿百石を受けた。元文二年利章卒去の後長齋は致仕し、爾後故侯の墳瑩に日參し、延享二年正月の終に至るまで一日も之を闕くことがなかつた。

タナカトモユキ　田中朋如　通稱平丞。實は小瀬復庵の子で、田中式如養ひて子としたもの。字は岡陵、侗齋又は鶴溪と號し、後に名を知顯又は定顯と改めた。能く家學に通じ、又和語五音の秘奥に達し、父の著作を繼ぎて倭語拾補十五卷を撰し、又越濱土産・越中紀行があつて、行文頗る妙である。朋如祿二百石を襲ぎ、役銀奉行を經て御近習番となつたが、後非行あつて、明和四年六月廿七日御預となり、七年五月十六日越中五箇山に流され、謫居中國學正義を起稿したが、未だ業を終るに及ばずして、同年十二月三日歿した。齡六十一。

タナカノリユキ　田中式如　通稱左源太、諱は式如又は式昭。字は玉之又は子顯。號は恒齋。實は德島の處士眞塩元東の子。江戸に出て吉川惟足の門に學び、一閑の養子となつた。後京に往き、卜部兼敬に就いて唯一神道を學び、貞享二年前田綱紀に仕へて二十人扶持を受け、元祿十五年八月新知二百石となり、十六年四月金澤に移り、享保十九年七月十日歿。齡七十五。その著に恒齋隨筆・新撰和訓解・立言源委・和語小解等がある。

タナカヒヤクシ　棚貝藥師　鳳至郡川西に在つた。能登誌に、『川西村に棚貝の藥師とて、昔は大伽藍の寺ありしとぞ。今に其寺跡殘れり。』とある。

タナカミユキ　田中躬之　通稱兵庫。菊園と號した。石川郡本吉の儒醫の家に生まれ、初め京に上つて皇學を加茂季鷹に、醫術を新宮涼庭に受け、天保五年歸郷し、六年金澤に移つて前田土佐守直時に仕へたが、規諫して退けられたが爲、町儒醫となつて國學和歌を教授した。後嘉永五年前田齊泰に召されて藩